



雪の出お路

二



ゆきのつなはぢ

二卷

○ ゆきのしづきはち

平鹿郡沼館属郷合十一箇村

○ ちいさなうら

○ 沼館

○ きつね崎

○ 道也

○ 古枝の柳

○ 今宿

○ かは野

○ 柏木

○ まやぎの糸

○ 下河原

○ 志賀の池

○ 東里

○ いなづるね

○ 矢神

○ 阿きの松

○ 西石塚

○ かみあ田

○ 造山

○ まな板志づ

○ 南形

○ やなぎはら

○ 深井

沼館村

里長 沼兵衛

郡邑記沼館城廻り村と沼のほ家負百十八軒昔沼司
沼郎居城中古小野寺遠江守居城とある慶長五年築城
ともふ故城の跡を真言派藏光院とて寺あり大澤へ二里二
十四廿歩今爲六町四十二歩浅森へ二里三十二間南間川へ
三里二十分八間枝郷八卦村十三軒上中島迄十三軒下中島
村七軒兵部澤村元禄元年禿村居りしとて今此沼
館を親郷とてこれ属ふ村々十箇村なりその村々今宿東
里作山南形深井道長根不西石塚下河原美神等といひ一
些ふといひ大澤深井はるもいふや水沼ありとて
柵ありしを沼柵とも沼館ともいひつる地なりとて
の此柵治歴延久の頃よりありとてその前太平記

昭和貳年六月廿日

三十四卷家衡移^レ出羽と云ふことより清衡歸^ル之後家衡獨^ニ言^ハし多^ク世^ニ不^レ思議の者なり清衡初^ニりし時我父清^ハ將軍の養^ニ取^テて子とし給^ハひつれども其實をい^ハひ彼が父に賴^リ義父子に被^レ誅し巨權^ヲ太夫に清^ハり安信^ハ貞任といふ母方^ニ付^テ叔父^ノ何れ^ヲ取^テる大事の敵誠^ニ勇士の志をい^ハひ今度義家^ハが下向を幸^ニに思^ハひ立^テ事^ニ有^ルるべきこと我當國^ニに任^メる或^ハ國司の命^ニとて或^ハ一門の謀^ニとて嗚呼^ハがま^ニし事^ヲを聞^ケけ先祖の國^ニに歸^ルるよしとて俄^ニに思^ハひ立^テ出羽^ノ國^ニに折^テ越^レ沼^ノ柵^ニ引^テ籠^リりて潜^リる公戰の要意^ヲを仕^テるなり云々見^エ同書三十五卷武衡與^テ家衡同意^ニと云ふなり家衡^ハ將軍國府^ニ歸^リ給^ハふ聞^クるも似^テ義家^ハ行^キ跡^ヲを敵^ニの待^ツ

と知^リながら境^ヘたも入^リえど引^キ返^ス法^ニやある是我武威^ニ服^セる家子徒黨^ノの惡黨^ヲを向^テて嗚呼^ハがあり^ニ廣^ク言^ハ吐^キて未^ダ戰^ハはば先^ニ一勝^ヲしたる心地^ニて大^ニ喜^ビ勇^ニつ勝時三^ニ度上^サせて沼^ノ柵^ニ引^キ返^ス詰^リる家子家衡^ハ兄清原武衡^ハ奥列^ニに居^タりしが出羽^ノ様を傳^ヘ聞^クる俄^ニに手勢^ヲを引^キ果^シて沼^ノ柵^ニ来^リ家衡^ハ對面^ニにさても今度^ハ拳^ハ動^キ傳^ヘる所^ニ驚^キ嘆^キ不^レ斜^ニ獨^ニ身^ノの人^ニ斯^ニに盛^リ將^ヲを敵^ニに取^テて一日^ニいふことも追^テ返^スしたることを揚^テ事^ニ和^ノ殿一人の言^ハをあら^ニ武衡^ハの面目^ニを武衡^ハ申^スる此柵^ハ分^ニ狭^ニ多^クの兵^ヲを可^ク宿^ルなり其上^ニ要害^ノの地^ニも非^ズ仙^ノ北^ノ金^ノ澤^ノ柵^ニと云^フ所^ニに此柵^ハ勝^リて究竟^ニの要害^{ナル}倡^ハ

や彼より詔ふしと云ふれば家衡尤も同じて聴て沼館
を棄て兄才打連の金澤の柵を摘詔ふと云ふと云ふた水
廣軍記二巻云々下野國古河城主小野寺前司太郎道
綱大職冠、未業秀郷より八代道義の孫義實が子と
むかし鎌倉右大将頼朝公の事にて勲功を尽くし南方
より其四男四郎重道父が箕義不失君はへ忠
あり頼朝公平家追討し給ふ時軍功に依て羽列雄勝を賜ひ
稲庭の城に居住す重道十六代の孫中書稻庭の城より
同列平鹿沼館の城に移り住す將軍義晴公の時
て上洛す世上戦止時なく賊等國々満て通洛成り給ひ
白國の妻の方より音づかす事もなく命を流土に終る
都よりありし時八幡の旅宿のまゝ娘と契りて男子一人

儲け其子弘治元年義輝將軍の時幸より君邊に
召されて輝の字を賜ひ小野寺中宮外輝道と云ふ
本國より下りて甚武威を振ひ同國大曲新和野神宮
寺角館寺の要塞を攻落し増田の城主小笠原信康
次郎光冬を討ち松岡の城主柴田平九郎を討ち油利十
二黨最上置賜郡間室の莊も盡し隨ひ我臣小野の城主
姉崎四郎左衛門尉を故なくして誅戮し彼が城を已に
三男と與ふ其政邪より惡逆起す時より郎等三春佐
濃陽澤の城に居住せしを我の城に移り替へんとせんけれ
ども三春敢て其下知らるるに終り三春を討ち湯澤
城を居住しと云ふも仙北金澤の住役氏金栗坊
といひ者忽ち逆心を企ていづも己が力に及ばず

因に密に横手佐渡守を誑か大将として数万兵を率ゐし
既の中宮外を討んとし中宮外を聞て安らぐ心是を
討んと天文二十一年六月大勢を率ゐし横手の城を取り
かり散々攻む城の内も飯詰し金乗坊一番をかき出て
防ぎ戦ふ湯澤勢尽く敗北す此時増田義興心替し
横手一味すれバ輝道弥おろきを取り人数過半討
てて引退く其時横手佐渡守怒り追うけ攻めれば小野
寺の味内八柏大和守計事を運らし表の旗を指さ手勢
三千餘人進藤原をひいてさしつめさんくを射かけま
余も代て終る討北し中宮外危き處を逃さず湯澤
行きなり嗚呼の臣とて忠死しとふ古人の教を守つて
まのため八柏大和守が余をあやまちをふくは神妙の

いふとたれ同舎弟孫七十六歳老人の耳目を殺すほど
の左なりとて其身手負いこね湯澤を引退く其
軍功を感ず中宮外嫡子景道の世も小野寺の姓
を許し湯澤の城主となしなりその後横手佐渡守金
乗坊西人心を合せ金澤六郎橘岡本堂堀田白山の勢
を催し仙北の人民を誑か其勢三千餘人を率ゐし數日を
つゞけ湯澤の城を取りけ散々攻め同七月六日輝光
自らかけ出て防ぎ戦ひたれども叶はらず流れ矢に中り
これよりさうめて討つとて嫡子四郎廣もすでにかた
と見えととらる其臣八柏兄弟関白落合の計事より稲庭
も立派しとて猶も敵を追うけし八柏が次男治郎より止り大将
四郎九郎を棄りまの余も代て討北し八柏太郎四郎廣を伴

い奉りて小野の里より八口内ヤウサイに忍び出、有屋金山を打越
元合海ハイツカイ押相貝オシアイの津より船の最上川を下り清川
より陸上り日數十餘日同國羽黒山に入りをてて三年の
春秋を送り去はる横手佐渡守中宮介父子を思
ひのり討取威をい領内を従へるをて一人に従ふ
者なく己がよりなふをてうめり小野寺の郎等角
鉾大曲白岩堀田神宮寺進藤金澤関口山田黒澤増
田西馬音内稲庭河連三梨沼館浅舞大森等城主
の面より引分き常々戦い止まらず人民安んじ心なく已
に柵家を捨て深山幽谷よりかくれ住るふかくて羽黒山
に在り小野寺甲斐磨父の敵を討んと近隣の兵を誘寄
悉く同心す其人々を算りて莊内大山に住武藤左衛門大晴

時同大梵字の住次郎晴安酒田六郎仁加保小笠原大和
守安重松根黒川藤島小國荻川野澤餘目一條三
由良五十川矢島芥田を始りて羽黒山の衆徒三百人
其数合五千餘人の勢に二手に成て一手は最上流を経て
八口内表より押寄り又一手は由利を巡て石澤玉前タマサキの切を
經て大澤敷より押かけしるを日頃佐渡守が下知をい
て小野寺の郎等もいかりをてて走せり四郎磨の勢に
加へ手痛く攻めたり横手金澤の両方よりを専度より防
戦し今と分國中みか四郎九が手より属せたるやふの
攻口を破る金兼坊も本城へつばみは赤木の時前田薩摩
守楠岡三郎六郎父子堀田治部丞本堂六郎一千餘騎
金澤を攻破り四郎九を加勢し横手源正坂陣

を張り四郎丸は内由利勢を率し吉田赤坂八幡の
間陣を取れば先手と馬倉増田山田関口山崎深堀
等七百餘騎川を渡し横手町構を攻入關所を放火す
れば石所本町荒所数百軒餘烟天を棕の焼く今ハ
叶ふやうもなく横手を始の金兼坊討残さるる兵五
六十騎を率し大勢をかけ入縦横をわたり追ひ廻り今を
最後と戦ひ少勢の軍は九巴爰かこき隠れて一
騎も残らぬ四郎丸陽澤の城より矢柏孫
七を居置小野寺の家石を許し我身ハ横手を居城と
し其を遠江守景道とぞ石来らぬと見え
同書二十九卷大谷吉継たかひぬ高寺の住人
小野寺甲斐守道親西馬音内式部少輔足田郡山童

子十郎八卦沼館大築地等馳がて大澤高寺雄勝は仙北同右あり
八反田の邊と相戦ふ元来玉前下村山北一味の軍は
此ハ裏切りして攻めたりと山田高寺もさるる諸のび
大木林の城をぞ詭りりふちんと見えたりといふと
ろたり南の入口を荒所とらふ皂角刺木の古木まのりその
と道祖神祠あり石雄元をいふと久保のいづこ
もおたじこをいふち門といふとあり小野城内の門の跡
もや左へ行ふ館小路右へ行ふ高畑中道を下り小路
より館小路より西へ行ふ下り河原村中より御物川あり
矢神村へ渡り北へ行ふ薄井河氣などの村あり
田畠ノ字地
柵の瀬いふの古河の跡なり今も地の底に水音するといふ

巽ノ方に在り畫飯塚中あしきなるに巽ノ方に在り寺
 脇南に在り千刈田木戸稻荷の前板杖東に頭
 無に南方大塚道へ上へ下り東方之父太郎北にあしき
 人より古きふよふ家衡なるの代に云ひ地名なりむ
 北の方に在り白旗稻荷前民に在り雑水谷地東北に在り櫻
 木いも一よき櫻あしきふもりて長持八卦道の小字なり
 下河原小洲野上中島村北の事下河原の巻のくさる
 小柳氏に望しやうにある書も新田開発も見えが今館
 小路に栖む瀧澤三右衛門祖開発なりふなりそのよしあり
 梅津家も三石餘りの水田を賜りし之下り中島今に家なりし
 鳥羽野西方に在り紙鹿野わらし紙すきしふまや雪に在り低
 館東の方に在り戈兵衛の谷地東方石河原街道の上へ千ヨ

カン琵琶ノ首いかなるゆゑもしらぬ地蔵のうしろ皂角ノ木
段このの下ハ八卦の邊うしろと田尻後田面街道タラシモテのうしろ法作り
梅充ぬま鶴田羽黒堂沼田など

○落葉

沼柵カキ作し、いのゝ沼館カキも同じくすべし。また、秋田、郡北比内、
 莊沼、鉾村カキの比内の沼館も、赤石脂カキを産す。至て佳品。古
 渡の薬師カキもふくふりのあまゝ、白石脂カキもよく産は
 る。

○鏡ノ社

○此社と新町といふ所の鈴木市郎左衛門といふ大工家の庭中に斎なりて大日堂といひ其ゆゑよし近き文化二年乙丑三月のけりばるる鈴木市郎左衛門耕のうめ田の南に出で千刈田といふ田地の弘法佃といふ字なる処とも堀なりといふ所の鏡を神といふを奉るなりと云はれし直り守公の花菱鏡のかりたり其鏡の厚九柱の佛の形を彫りてその内蓮の周に花の花びらの内を上へる薬師如来中大日如来下無量寿如来その左右に冠師菩薩釋迦如来文殊并觀音并彌勒并普賢并みなかりたるあいらの内座りふちばさちの尺二寸をくりその裡の方より風鳥二羽を鑄画そのあぐりといひ細字に「永

延三年八月三日幸以奉始八葉九尊壹院願主佛大伴守
光女且主伴希子願也佛師天台僧蓮如とありたる文字の
さゝやみとしてよみがたれどあらうやみつるはをあらぬことは
そのいさくそと寺や建けむその人々や住りけむはなるふ
べしと云ふ六十六代一條院の御代とて永延三年己丑のとしは年
号なりて永祚元年とあらう前太平記三十五卷將軍出
陣のころは去程に諸國の軍勢皆催促して從ひ馳集
けるその着到を算ると統べて三万六千餘騎とぞ注したるさうは
出陣の時として寛弘三年六月十六日前後の陣を備へ諸軍の
手分を定めて將軍御馬を召れりとも源氏譜代の郎等大宅、
大夫光任年八十りて腰に二童子成り杖よりかり從者も手を率
れて罷出て御馬の轡を握りつゝ涙を拭いて申々るは年の実なりと

いふ事を哀しくも侍るものなり。那往し大國年の戦ふに片時の間も御父子の御馬を放る事なく余を陰より契り進せり。あまふも手を合て將軍を拝みさて、光任も果報力を主君二代に仕へ進せ斯あが上意を承る光立し人々に誨る勇々しき事をい見たまひ、草の陰よりを羨し思はくよし愚息の候もの多くの人の中より選み出され、備伏と補せらる事。是併君の厚恩なり。ちか光房慥に承れども、備伏といふ事ハ奥列の國司たる人、備伏二人を給る重代の武士の中み、其畧量を選て將軍の判授の官に然るも二人の備伏一人と伴、次郎助兼一人の汝を選る是、莫大の御恩なり。ばや云々と見えたり。其永延のころより寛治のころまで、あまふも百年

後胤なごころやうほ知の人さうづねといまほし

沼柵八幡宮ノ由来

○そとく北若宮八幡宮と其むく一箕前神山といふ
は鎮座せし御神なりそのゆゑとし康平の世なる源頼
義朝臣義家將軍安信貞任宗任追討の陸奥國を
おとし給ふとも出羽國最上郡境を看おし給ひみちの
の武士沼倉老郎某も御内堀野小澤太を以て此處に在る正
司次郎を頼みかゝる作せしめて矢神山の神を幣奉りい
りてこたひの大敵をむけ平む宿願さすやいともやうに沼柵の御
使を立てあらぐのむねをまきうらばうづなひおしこめて
正司次郎矢神の社を七日のいれい冬就いて朝夕いたさる
る祈り奉りしえりしや將軍の御心よりめりし強敵
さうち或は擒しこのち矢神の社をいり大やうに造営て

若宮八幡宮を齋奉り給ひてより其世の神殿十五間
四面より作らば鬼瓦より木の葉を作らるる所あり
いかに水形鬼や此事矢神造りていかにあつても
いかに其鬼板なりてくたげあると火災ともや火
りて今宮の戸之内より家藏あり寛政三年山北の金沢
攻の御下向も箭神の社よりていかに前御師刀を神
手祭に御神樂を奏し浅うに北賽のとき神寶をこ
寄附給ひてより傳ふる若宮八幡の縁起より天喜五
年八月下旬源頼義公朝敵為御追討奥州御下向に康平
五年云々沼館若宮正八幡御立願御果し有之事云々
此沼館八幡宮と云ふ矢神の八幡宮なりとあるも
延久元年沼館
莊司次郎出羽十二郡給為守護沼館城廓普請之事

云々同年御本尊御供有之此本尊は寸八分の赤梅檀の神形なり
神主代り二度神奉りていかに都本宮神主二人御陣内より獅子一頭八乙女
揃道跡神樂奏し獅子郡天下國家為萬民御祈禱同
五月二十日都立給八月十四日出羽國平鹿郡仙谷莊
館城有御到着則莊司次郎藤原友利為大工奉行御
社御建立有之頼義公御代官給莊司治郎始流鏑馬
行ふに此莊司次郎友利の創めより天喜康平の頃
り其石崗えその後元暦文治の頃とありし
をいへ元暦年中平家追討の時小野寺重道國
を軍功あり恩賞より右大將頼朝公より出羽國
雄勝郡を賜りて稻庭城に居住その小野寺四郎
重道より十六代より中書植造代よりて稻庭

鶴ヶ城子次男晴道を居置きその身と平鹿郡沼館城
に移りかゝて後萬和院義晴將軍、即代大永年上
流して数年本國にくだり都を卒り其男都を出生し
成長、後光原院義輝將軍に仕へ近習となり將軍の
御諱、字を賜りて小野寺中宮次輝道と号して本國に
下り沼館城に入りぬ其子遠江守景道とて横手居城
を新く普請し引移り執權多々勢をゆるししと
おもしろその中書種道の代に明應文慶の頃、鶴ヶ
城もいり里より火災に罹れば天神山なる八幡宮を沼館の
城中よりうつり奉りて、そのを尽して神社をみかたし、
るやびりしふあつて神田もくくら宮附れあふ、神祭
の獅子頭を纏衣ふもかゝり小野寺の山家紋を唐奉納

り國家安全武運長久の爲めと舞い廻らせりたり
今もそのゆゑをもちて八月朔日とて月尽まで雄略平鹿
の兩郡の郷々里々を廻りたり傳いあふる事とてあ
はれ小野寺の代に宮附の神倉ルいさく多くなりしと
慶長六年沼館落城の時、神庫の破壊神寶もたゞ
は失せかゝるとし、後ほど寛永二十年根本岡之辻果
といふ人頼まてり、その人を追ひて鹿間四面に神社を建て人
みかい、いさくあつたりなりしを、二年三年を経て正保年
中、社地の近隣なる安養寺より火災でみづ垣よりつり
やがて御在所よりかゝりて宮をここがくえり、あはれ人々火災の
中より飛入りかゝりて、即正体神寶いさくあつたりし奉りて
其外の寶物も、神倉古標札縁託古託録等みづからせて

いふくを見つへり、草のたつらの露斗りぞ残りたるさうと
古来の耳に傳のこしたるを傳ひてひとりあたつをものゝ書
託てそのむくもどて存し世を偲ぶのこなほ近き世の事
といちむろく此を又あるべし

○八幡宮御神像オホミカミガタは源義家將軍ミカド中ナカ子コ齋イハい牧ウシめて
戦いくさひる志こころりまのちを得てその塊ミカドの神形ミカドを本尊ホンソンと奉ほう奉ほうり給
ふとと赤梅檀アカウメタンを造り奉ほうり一寸八分の神像ミカドの神官ミカド一代イチダイの一
度拜うやまつし奉ほうは秘ひる御神ミカドなるバ餘人コトヒトやめく拜うやまつ奉ほうり事ことあり
ハトとあるいふ

ありてはふかりて残したる其腰子フキト天喜の文字ホ仄見ホなりしが
 是も回祿ヒョウカキのやうなところである假面カクシ一面ヒツツの春日ノ作なりし
 古代の神輿ミコシハ金具カナモノ四枚ヨビツいりてありて残したる鞍ウラ橋ボネ尤
 うりなりし移鞍シツウラ一ヒツツ兜ツツ二

○
 御横刀奉納享保十二和年願主薄井村内舟沼小野利左衛
 門とありある二王門、服士石像元文四和年願主當村瀨澤三
 右衛門と周るり

○ 郎左衛門賴清作者秋田藤原成利別當宮川戸之内政吉代之
神鏡奉納願主石川五郎重儀鈴木兵衛重

常小澤市イマシユウ右馬門オウバカド春豊星山ハシダ治部助詮侶ヲマダテ小柳莊兵衛古道コヤギ
寶永五年田中伴賀作とありたり

○神鏡奉納同年領主當村浪兵衛同右馬門藤左馬門鏡

堂子書カキテりあり寛文記録のゆゑ寛文八年戊申三月十八日

鑑照院カミサウケンテン殿権少將左近周源義隆公の御子と云々御渡り野のより浅舞御カサ御旅

館より作せしめあれは若宮八幡宮カ御神跡古作獅子

一頭鬼瓦等尊賢ととなてりバ御祭料とて白銀

彦枚とありし

○鰐口奉納寛文十二年角間川新田目喜右馬門

藤原道房とあり

○延寶六年戊午二月二十九日 徳雲院殿義慶公の御

御鷹野ありしと高畑正喜といふ人を以て御代とて

社参りその時御祭料とて白銀壹兩を賜ふ

○同年五月二十七日梅津半右馬門忠實殿江戸より下向の

時若宮八幡宮の午王寶印を献タテマツりしバ御初穂料とて

金子百疋を賜ふ此時厚子御志しめぬと云ふなり

○同年八幡宮の神社大破り及び奉加の事願ひ申さる

者なれ御免りて御尤中より始主殿殿主計殿決断殿重太夫

殿よりハ宮殿建立の奉加を付せしめり

○同延寶九年辛未本社二間建立

大檀那左權少將淳義處公御代官梅津半右馬門忠實

梅津御家中下村弥兵衛 石井市郎右馬門

普請役當村小柳庄兵衛

右宮中棟札に記したるものと

○陣 御内陳御室高附ハ梅津羊左衛門殿奥方雜産、御立願御
いのり平産の後御南料トて田所縫殿坐殿を以て白銀二枚
ヨリ御内陳の御室附ありふな具ハ久保田鍛冶所
金工屋九兵衛トあり
○寛文記録の内沼鍛村より漆木拾本八幡宮の木之間毎年
御役取らるる要い
寛文八年申、元月八日梅津羊左衛門判

漆役人記

元禄託録 立願状之事
一此度御境目御筆論之儀御當領御利運之事
一百姓共於 公儀勝利之事
一武運長久子孫繁栄之事
右條々以神力諸願成就奉祈所也依之為願上御

堂御修覆可相勤者也仍願狀如件
元禄十二年卯十月吉日 願主敬白

大越韃負尉藤原茂國

御初穂料トて白銀三匁

○鐘樓門、洪鐘子寛政四年願主佐々木義右衛門越
後國三島郡大久保住鑄物師小熊篁治郎吉次トあり

○末社神

○西方愛宕社同三間 元禄三年建立二月二十四日鎮火祭
六月二十四日奉祀之北社地長十九間同 南北方同 北方同 南方同 願主惣
御中別當宮川戸之内藤原政道

○北方白幡稻荷大明神同 寶永五年戊子九月
大旦那源次郎義格公小旦那川上治兵衛川尻晴左衛門

那可能助八代角助久賀谷彦十郎 願主社守、當村伊藤喜
左衛門別當宮川讚岐守藤宗政道と棟札に見ゆ

北白幡神社明神ノ神社とさやなる祠とていふこと

座を新田壑のともいかなる社とおもふなりとて伊藤喜左

衛門といふ翁にたつてらる社神といひて古く御神あり

いひつとより阿多人の裔いまつりし社とてをせば那珂能

助といふ人聞おとより伊藤喜左をて人々進め神社再興

なり那珂氏御旗寄附せり稻荷大明神といふ旗ノ文字

と稻荷ノ社教方正五位ノ下後川佐渡ノ男非藏人後川備中

ノ奏親芳の書ここと禁庭の稻荷の御旗を臨書たると

此旗の縁起を見ゆ享保十一年丙午七月吉日久保田家士

那珂能助藤宗通達寄附其由来と同家士茂木源知

亮作之祭日二月初午、日五穀祭九月九日、神事ハ五穀
成就報祭の祭なり

西方法龍社二箇享保四乙丑年建立祭日三月十八日

大旦那澤義峰公願主當村中別當宮川讚岐守政道とて

東方正一位木戸稻荷大明神ノ社寶曆四年年建立社三箇

社地ノ長士間櫓七間東七間願主當村中別當宮川讚岐守政道二

月初午、日五穀祭九月九日五穀成就祭の祭之北御神を五郎

稻荷といふなりといふ九月九日忌夜に村の女老うち群衆門

ごとに入て五郎兵衛様の奉加とて葦束を一束二束とせりい

集めて田の面より火高より焚たつこと今迄のかりやある

豆子稻荷におおし様のこといひのめいへ豆子稻荷といふ

ふり座バ人みなを託傳へてまらざる奉さるもの（旧冊ノ

城ありしところ此のうらなにとに柵戸キドありしゆゑに城あり
この田地の字はうらなにとに柵戸キドありしゆゑに城あり
とあるはあはれなる木戸五段兵馬某と云ひ人の鎧のゆゑ
奉りて稲作の神社なりとあるはあはれなる木戸五段兵馬某と云ひ人の鎧のゆゑ

八卦神明宮北神八卦村の本と座一が宮地と御膳川近く
てやがて其岸崩れて座を壊しあやうければ此の神を人
の家より移して志志と云ふ村に不祥なりと云ふ事多し
こと神のお供なりと云ふと八卦村の東の入口のみやと云
を定の寺なり領主里長奥山治兵衛文化三年丙寅五
月祠再興之あり施主市内文治八号同助之と云ふ南主官
川筑前正光代なり

八幡宮神官累代

宮川氏の上祖宮川左衛門三郎藤原政治といひ本
伊勢國度會郡豊宮の所と云ふと山城國男山登
り石清水の神社祠官の神社考詳節に云う相模國鶴岡八
幡宮の後冷泉院時源頼義奉勅伐安徳貞任康平六年
八月勸請石清水建宮於相模國由比郷永保元年源義家修
理之今号早治承四年十月源賴朝遷之於小森郷之北山云々と見え
る此鎌倉鶴岡と云ふ十三年後延元二年石清水八幡宮
を平鹿郡千箭莊矢神山に遷されたり此の神古縁起
本宮神主二人あり一人といふ宮川左衛門三郎藤原政
治と云ふ一人といふ宮川氏と云ふ神八幡宮神官と
なり今一人といふ宮川氏と云ふ神八幡宮神官と
なり今一人といふ宮川氏と云ふ神八幡宮神官と
なり今一人といふ宮川氏と云ふ神八幡宮神官と

あり矢神山よりわたり世を経て小野寺中書極道方神八幡宮を沼柵の城中に遷すなり。神官従者後ハ沼柵よりつり住ハ沼柵居城のころ一人の行方をおとハ澤木の樹根坂の白山社の祠に宮の在処といふ所此人其後胤をりや不や一人ハ宮の藤左衛門と名なり。百十一代後光明院の御代正保年中神殿焼亡。累代の系譜古記録して五百四十餘年が同世代の人々を志す。代々戸之内といふ人多し。と宮所の河内ふ事あり戸の内といふ宮の戸之内某ハ元和の産あり。延寶三年乙卯四月卒去此人をよて中興の祖とせし之。

○二代宮川讚岐守藤原政次天和三年癸亥三月卒。三代宮川讚岐守藤原政通享保六年辛丑二月卒。四代宮川對馬守

藤原政次享保六年辛丑九月卒。五代宮川讚岐守藤原政國安永八年己亥五月卒。六代宮川戸之内藤原政重此戸之内政重秋重なり天明六年丙午七月卒。七代宮川筑前正藤原政光文化九年壬申八月五日卒。八代宮川戸之内藤原政信當神職之。

○若宮八幡宮並未社年中行事登禮社式之次第

○正月元旦ヨリ十二月晦日デ毎朝天下泰平國家安全御武運長久五穀豐饒ノ御祈禱修行舊祖ヨリ當職至マ神祇祭事古格之如聊急ケ神事法令相守リ末ニ也

○正月元旦日早旦ヨリ潔斎家中張注連改火家人悉淨水ハ着淨衣不淨者忌去但忌魚鳥等兼テ家屋設神壇一献御飯餅神酒松昆布一御宮殿之御戸奉開御帳御簾垂注連飾備牛王寶印御祓進神前御祈禱奉幣祝詞勤之但此子共初社奉有二日早旦祓修行

右同斷三日早旦後修行在同斷四卯上刻御宮殿獻御供後修
右同斷此日神官社奉仕人々不達此往來神官達人短余之五日早
旦後修行在同斷此日牛王寶印七日早旦獻七種雜煮粥
神酒松昆布一後修行在同斷九日早旦木幡松而明神獻御供神
酒造酒糟松昆布等御祈禱修行十五日早旦獻御供神酒前南
進神前御祈禱奉幣祝詞勤之十六日早旦神前天照大御神前
獻御飯神酒但白粥山海野產物ヲ調進御祈禱奉幣祝詞勤之此日門令
シ集ヘテ直會ナホ乃ハ廿八日早旦寶就神社獻御供神酒
但一日前南後修行二十四日早旦愛宕神社獻御供神酒
等但一日前南後修行

○二月朔旦獻御供神酒等前南一日後修行初午日而社稻荷
明神ニ五穀奈御祈禱一日前南獻御供神酒等備御奉幣

祝詞勤之終テ直會式後御祈禱御札乞請里長是ヲ據所
里ニ拜分ニ賦之ニ同日社日祈年御祈禱前南獻御供神酒
奉幣祝詞勤之

○九日早旦而社稻荷明神獻御供神酒一日前南後修行十五
早旦神前獻御供米神酒一日前南後修行十八日武正月準
二曾愛宕神社於廣前鎮火奈御祈禱一日前南獻御供神酒備
守札奉幣祝詞勤之次直會式守札氏子ニ拜分ニ三月朔旦
本社於神前御祈禱一日前南獻御供米神酒御守札奉幣祝
詞勤之終テ御守札登壇子賦之三日早旦神前御祈禱一日前
南獻神供蓬餅神前桃枝添奉幣祝詞勤之次神酒拜頂
之九日二月準十八日寶就神社御奉禮神前御祈禱一日前南
夜ヨリ獻神供神酒奉幣祝詞勤之次神酒拜頂退下二十四日正月準

四月朔旦神前御祈禱一日前齋献御供神酒等後修行終了神酒
拜頂退下八日後修行在同新九日同上十五日同上十八日同上二十四日同上

○五月朔旦三月朔旦準入五日早旦神前御祈禱一日前齋四日後
舊備ヲ以テ献供御供神酒奉幣祝詞勤之次神酒拜頂退下九
日後修行二月準入十五日同上後修行二月準入十八日後修行二月準入
二十四日後修行正月準入

○六月元旦神前御祈禱一日前齋献御供神酒氷餅氷餅をみか
り式子白休せられち此餅を同月某日此日昆虫後ノ神事一日前齋献神供
神酒等或注連神樂殿御湯立御神樂奉幣祝詞勤之但し柳
柳ノ枝ニ白帶付々此ノ神ノ備ハ赤金ノ湯ヲ
暖シ田畑ニ立ル事一節ニ十回ト云々避クト云又此日暮ヨリ炬松ヲ振り柳ノ枝
ヲ取持笛太鼓銅柏子ノ囃シ聲耳ノりたり叫ルて送りて舟浪邑
薄井村ノ境ニ至ル火を高く焚火ヲ捨て皈と一り九日早旦後修
行終了

行二月準入十五日早旦神前御祈禱一日前齋献神供神酒等注連
引御湯立神樂同日祇園鹿島社ノ献御湯奉幣祝詞勤之次
神酒拜頂退下十六日鹿島舟送ノ鹿島人形御中ノ人家ノ作
鹿島餅ノ家毎搗キ此草人形ノ餅ノ酒とを備へみか人形をと
りのせ舟粒ひく人形ノ餅ノ酒とを備へみか人形をと
照らしやう竿の先ノ燈籠を付けていづる人といふ事を志し
心よりやし笛太鼓銅柏子板尾螺を吹き囃しる焼石
川とよみ小石ノ此鹿島をとり流すことそのこと此鹿島の
祭礼一日献神供神酒等奉幣祝詞勤之
○七月朔旦早旦神前御祈禱一日前齋献神供神酒等七日後修
行在同新九日後修行在同新十五日早旦神前御祈禱一日前齋
献神供神酒等奉幣祝詞勤之

炬火庭燎ノ如シ當日御湯立神樂奉幣祝詞勤之次神酒
拜頂退下十五日十八日二十四日毎月如常例

十月朔旦九日十五日十八日二十四日皆如常例祭之

十一月朔旦九日十五日十八日二十四日如前例祭之

十二月朔旦於神前御祈禱霜月晦ヨリ今日御守札奉幣祝詞勤之則御守札抄所賦之七日家屋ノ設神壇十五日マテ潔斎引注連獻御飯山野産物餅神酒等奉幣祝詞勤之次神酒拜頂

此夜氏子中通夜退下九日早旦神前年越御祈禱獻神供神酒等

奉幣祝詞勤之十五日早旦於神前年越御祈禱十四日暮夜ヨリ夜前氏子共通獻神供神酒蠟燭目郷中ヨリ十八日二十四日年越神事同

断除夜歳暮御祈禱一日前齋獻神供神酒奉幣祝詞勤之

臨時諸祈禱之事

安産御祈禱疾病御祈禱雨乞雨止御祈禱疫病

御祈禱諸災害ノ類ノ

諸掾處年中行事或祭式次第

正月春祈禱 當村ヲ始ノ諸掾家大柴獻神供神酒其外如

恒例後修行九日市神祭村今宿前イナカ有一日肆中ノ大柳モト下ノ設イナカ假

殿イナカ獻神供神酒等奉幣祝詞修行宮川戸之内勤之次神

酒拜頂退下至子頭タラシム人之家衆人ト共祝年賀直會給ナホラヒ

三月西野村鎮守藥師如永社 稻荷明神社 未社 神樂社 藍婆社一年八日於藥師

社総末社共ニ祭事勤之一年八十日於稻荷社神事式勤之十

二日今宿村ノ内向郷村遠藤勘右衛門家内神ヤサカ大山祇社祭礼

一二前日獻神供神酒御湯立神樂奉幣祝詞等宮川氏勤之次

神酒拜頂退下十六日今宿村鎮守於神明宮廣前鎮火祭

神事前日献神供神酒等於神樂殿御湯立神樂奉幣
祝詞宮川氏勤之其餘如恒例

四月三日東里村トウサト内東槻邑トウツキ辨才天女祠祭禮前日有一日
献神供神酒等御湯立神樂奉幣祝詞宮川氏勤之餘同
前禮式九日下河厚田稻荷明神社祭禮前日献神供神酒
等御湯立神樂奉幣祝詞宮川氏勤之餘如常式十九日
東里村内廻館村マツカ稻荷明神祭禮前日献神供神酒等御
湯立神樂奉幣祝詞宮川氏勤之餘如恒例

五月二十日深谷村神明宮祭禮前日有一日
献神供神酒等奉
幣祝詞宮川氏勤之餘如恒式

六月三日西野村トウサト昆虫校ノ神事前日有一日献神供神酒等
御湯立神樂奉幣祝詞宮川氏勤之餘如常式同月今

宿昆虫祭前日有一日神事是後修行同前七日東里村昆虫祭

同前十日西野村神明宮祭禮前日有一日献神供神酒等御

湯立神樂奉幣祝詞宮川氏勤之十六日今宿村神明宮御

祭禮前日有一日献神供神酒等御湯立神樂奉幣祝詞

宮川氏勤之餘如恒例同月造山村昆虫祭是日後修

行西野村前日有一日

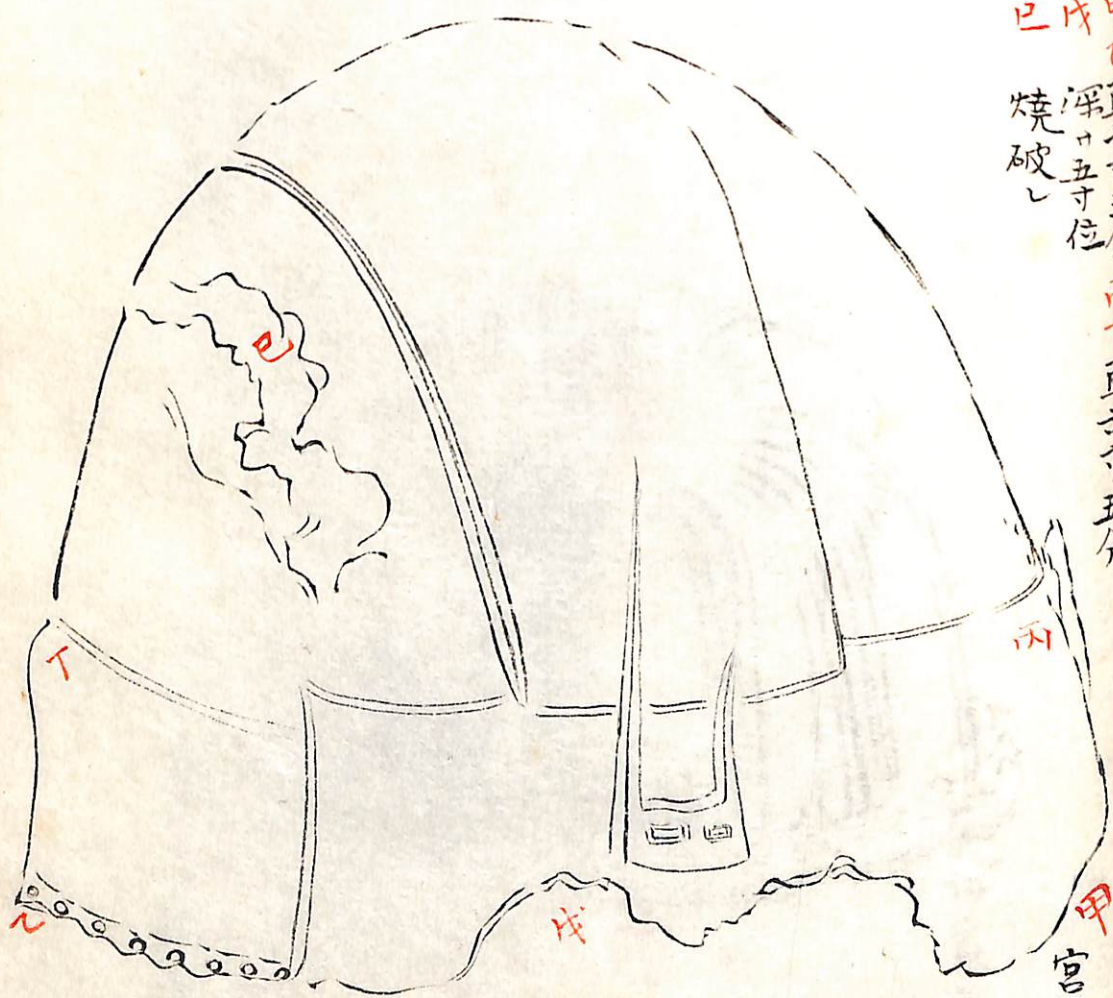
七月朔日沼館佐々木改吉内神神明宮祭禮献神供神
酒等奉幣祝詞宮川氏勤之

諸假栖諸祈禱例式

沼館村西野村東槻村今宿村造山村宇形村下川村

右七ヶ村代々上下接宮川氏持来如先例勤之

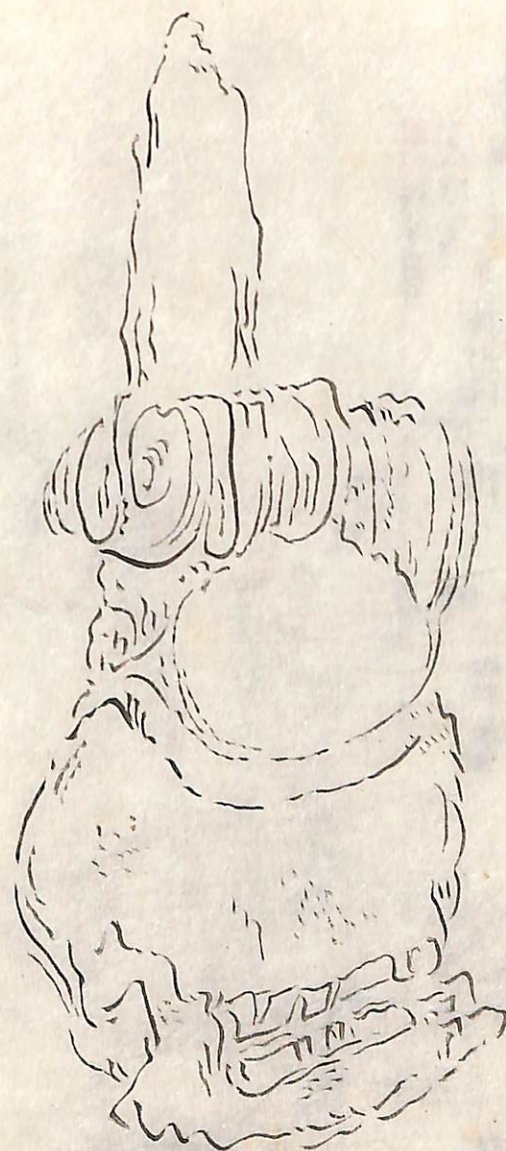
鎮火祭札地今札後清淨後札陌過神束木等右村々



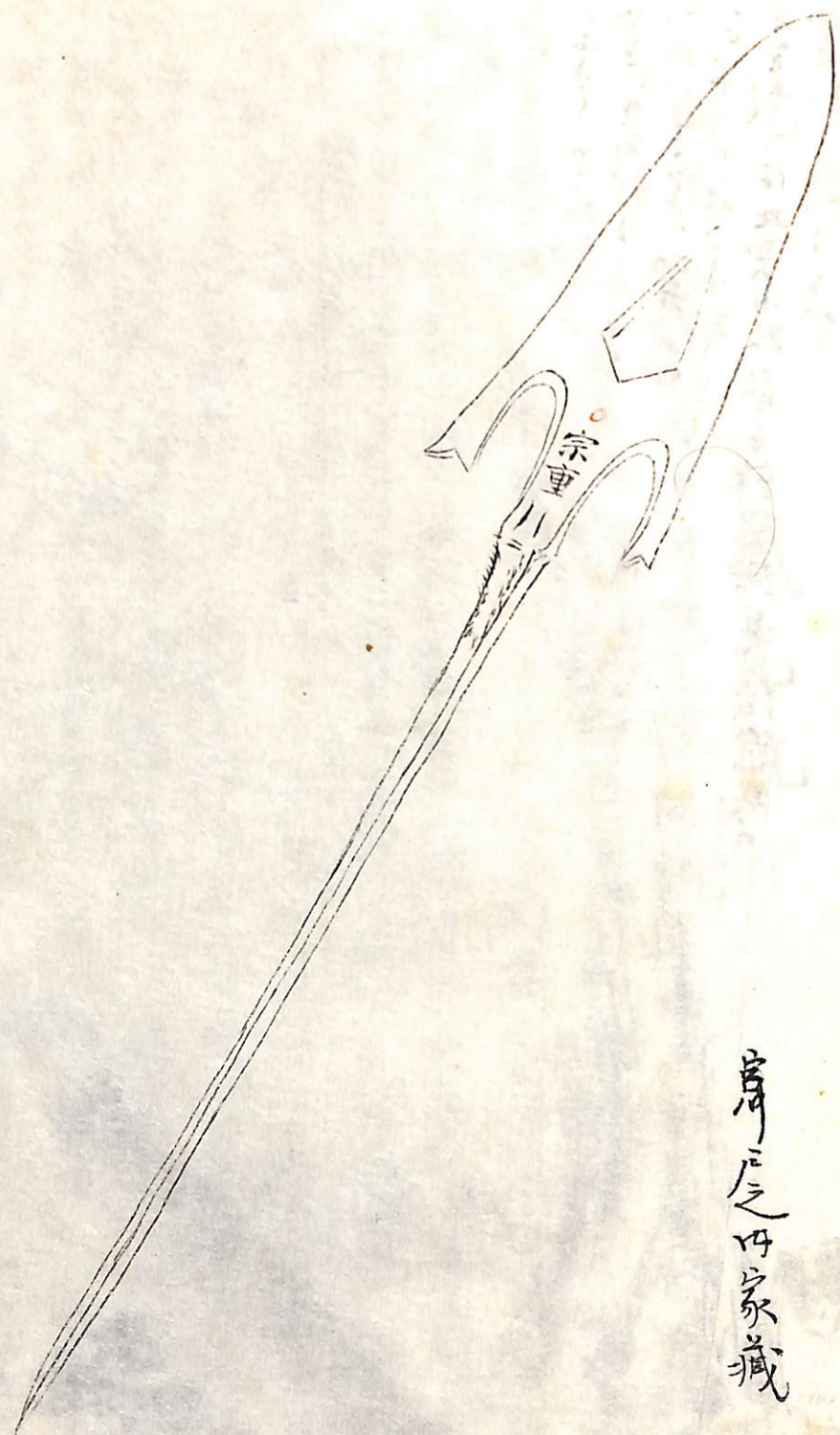
甲
乙
丙
丁
戊
巳
燒破
深
五
寸
位

丙
丁
五
寸
五
分

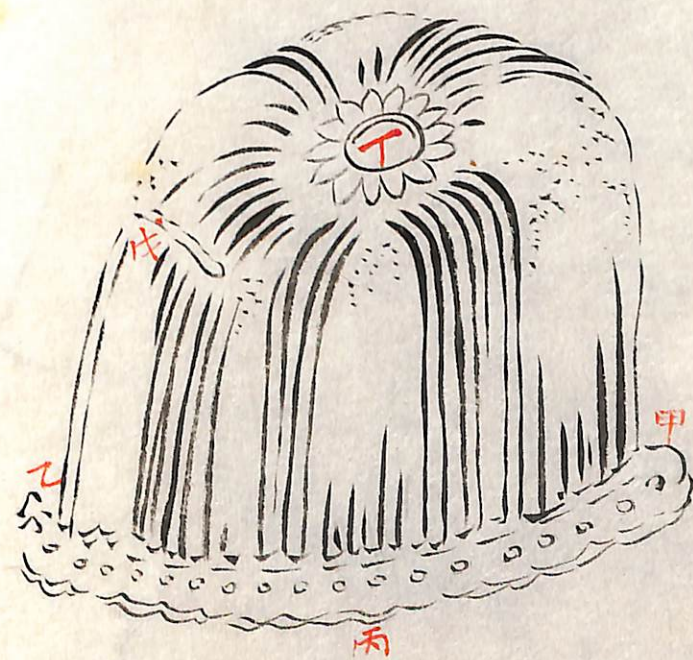
宮川戸之内家藏



宮川戸之内家藏



高麗之世家藏



宮川戸之内家藏

甲乙 直七寸五分
丙丁 深罨四五分
戊 太刀疵多

藏光院の庭に枯木の松ありその高サ二丈二三尺の木あり
 ありて小野寺殿中の庭にあり是を中の松と云ふ
 宣の獅子をあらうと云ふ舞の初なる中の松を松の三本
 ありて其中の松と云ふいふやある中河の松と云ふと云
 ひ省りや此松と云ふは焚ききつて旬日なるを要の小松と
 いて此曲と云ふもいふ獅子と云ふは此松のいふ
 いらるるこの松と云ふは主人のいふ錦織と云ふ
 中よりいふあり
 此獅子は雄勝平鹿の村に生れしと云ふいふありし
 角同りなり小野寺殿中いふと云ふしみある松と云ふ
 その角同りの松士の云ふあり小野寺中書と云ふ人
 皇都と云ふ錦
 小野寺また校小路
 の中よりいふ此獅子の
 曲と云ふいふありしと云ふ
 おんいふと云ふ此獅子の曲
 を傳へしと云ふありしと云ふ
 松と云ふは此松の曲と云ふ錦の松と云ふ後的小松の
 曲と云ふいふありしと云ふ



藏光院

此菩提寺鶴第
 小野寺と云ふ金に貴
 のこちありあり
 義家受て寺にあり
 ありしと云ふ門のありて
 ありしと云ふ明りありあり
 ありしと云ふ筆と云ふ
 ありしと云ふ筆と云ふ
 ありしと云ふ筆と云ふ
 ありしと云ふ筆と云ふ

雄勝山菩提寺藏光院ミミタテの古城小野寺殿の跡に
 本小寺雄勝郡高屋田村の枝師鶴第といふあり
 存し寺なりと云ふありしと云ふ雄勝山といふ山ありあり
 ありしと云ふ松宮三輪山吉祥寺の門ありしと云ふ寺に紫銅の
 碑ありその碑に累世の僧と刻ありあり開山橋大僧都
 宥舜法印二世法下宥京三世法下宥長四世法下宥
 伴五世法下宥貞六世法下宥可七世法下宥三八世法
 下宥全九世法下宥常十世法下宥廣十一世法下宥
 清十二世中興法下宥受十三世法下宥實十四世宥敬
 法下十五世法下宥程カナヅミ此銅牌の裡面ウラオモテに羽國平鹿
 浪鉾村雄勝山菩提寺藏光院奥之坊開山法下宥

辨長治元年申中仁王七十三代堀河院御宇也然而
中古中絶無住因茲三十代不分明傳聞分如此耳寛文
十二壬子年十月朔日より文廟房法印宿受住持天和
元辛酉年寺建之其後堂等什寶道具田畠寄附
之元禄七年戌年開居寶永六己丑八月七日夜五時春秋
六十五歳没圓刷房宿雪元禄十二己卯四月十四日没智觀
房宿敬元禄十五壬申七月二十八日没中興宿受末弟了前宿
程建立之と見えたり藏光院の額佐々木玄詠書りいよし
への属寺とおひきさうやうなる堂舎も山の号寺の号瑞
ぬきと醫王山樹林院と運慶が作ふ樂師如來六寸
の座像も其たうなる事いふやうにあるがその内男
鹿の大保多の浦なる阿彌陀佛とありこの陳和卿

ら作りしといふものなりといふは似たり寺と名のこま
今いふまゝ堂の内に安置りある春永山壽福寺なる
正觀音も立像なり波羅門僧正の作しといふ近々
世天和三年癸亥ノ五月十八日の棟札なりやの寶光山神
徳といふは是棟札も天和三年癸亥九月如意日
と記しりこゝの本尊を辨才天女といふ此堂なるありし
下河原に住む佐々木市左衛門が弟えし家傳する堂に
てそが家の紋も四目の形残あり其近き安永の社に
其北に寶詠權現の社ありあゝ菩提寺に安置十二神
將の古佛などといふ佛師の作なり見えたりあり大日
如來の泥像の徑は寄進仁和寺慶安二正二十八阿澄敬白
とありこゝはさういふ見し佛なりやの真黒さすづ

ける棟札一枚ありその本誌山神柳古天和三年八月十日山
神別當雄勝山藏光院筆者信銘時藏光院中古開
山宿受と録しなりこと大森の文部本師の座す山神
別當大森村の大森古く其別當の記録より所由と云ふ事
佐々木左衛門門上祖望の田字十二柳といふ故に移天和
三年癸亥八月十二日今の大森寺山神の別當をつとむといふ
十三柳堂といふ山神といふらるる幸子山神也斎奉りし所らる
いづれといふれといふらるるのさうりれと十二柳といふ名に
神柳古の由忍と云ふ事此寺累世毀廢時と書候事といふ事
何と云ふ十九世の快秀二十世の信怪のふぐい之北藏光院の
庭中子松の林木有り其高サ二丈五尺天斗に生りこと山神
寺の城ありしところの中洲松ありしをいひまゝ八月朔日

此限録のハ幡宮の獅子頭がより舞子先りたの庭松の
本もいへ儀始て初場踏ふ事をせしむらゝを旗の
ふゆゝことあたらふ春永山より福寺の觀世音春日
か作を仙北三郎の寺別礼に北はらちと三十三番子
あたへてすゝつて人々

東泉寺

○青龍山春泉寺曹洞派之本山越後國南原郡
下田村瀧雲山長禪寸之東泉寺開祖海翁端隆和尚
天正九年三月二日寂二世傳菴正法和尚正保三年四月四日入寂
三世起歿無起和尚
尚四世貞山良淳和尚五世悦斐默禪和尚六世閑遠智
玄和尚七世功山栄全和尚八世禪山石象峰和尚九世孤月
雲晟和尚十世惠玄觀樹和尚十一世隱山孤心和尚十二世

真範豐洲和尚十三世牧山愚童和尚十四世寶全和尚當寺十五世有隣禪英和尚十六世現住無透閑光和尚退院

○安養寺

○此安養寺、青龍山、東泉寺の末院なり。開山、東泉寺
二祖傳菴正法和尚之二世なり。平儒寺成と見え、たれと古
此寺沼、敏西御膳川のあたりに矢神境、兵部澤の邊に
存る。天台真言宗なり。もやあらんとも古き寺と云ふ寺あり
つる跡を今と寺澤といひ、また寺澤はおねとつり

豆ナツト致ウマ双ツリ示

沼鍬の若宮八幡宮の神事八月十五日亥十四日の夜
 よりこころの商人山崎さづらり糸束餅豆々々物を賣之
 これを諸人手と毎子買ひいれ家々あつととそしはさうりん

是を納豆といふなり納豆八幡などいふあるハ悲^{カコウ}し
あまー奉ふりの水

七、不則

○沼館の七不思議と云ふ一寶歌権現の社の^{四ツリ}_{マメハタテ}の豆生
の大^マ豆^メして豆腐を制作と豆腐出来ざらば^{ナラバ}異なる事く
其豆畑ともし杉の今いりくとて^マ豆^メ甫^フいりし之^{トモ}
うりや二宮野目の燐火下河原村の西端も見え宵々七
過るころいつしみやあの晝飯塚の上鬼の燃る三放ち馬
社内へぐに家毎あまたの馬を野放すれどさばかり廣く八
幡食かみやざらりと春夏秋入たる事ありと云ふ^{クサミ}養六
^{シヨウジ}尿て神境をけがしとを見し事なりといひ四皂莢門^{サイカヒモム}_{小野寺の世代}
の^{ヤア}ありけの其跡は其木は残ればあらう此皂莢子多く成る年

田安貞登らばとて北皂莢を登るのさうりちていふも二三
 葉隠れを年々集るふありとて五堀苗代の夜狐古城
 の外堀今と内堀と化してその苗代時バを堀苗代とて
 北田面を夜狐の鳴上れば師子不祥なる事のごまきとて北小
 田を夜狐つねに幸する事あるとていふ六柵の瀬水
 音柵の瀬とて往昔大河流ゆる跡今田島とて其川
 筋をとりて地底より水音高く聞え事なり七一家の疫病は鉾の
 瘟疫すれどもいふこと人々傳染するありとてその家の親
 戚も一向に其家に入らずとて密にえん病をそはるる
 こと村の人をその家に入れば其病をうつとて

沼館ノ右産

西河の銚内川の雑果とて西河に御膳川をいふ此川に

づゝる銚内川に北沼館のさうりち多く黄金やとていふ
 よく白銀色する銚内川にみえりもの之内川と焼石川
 北川のくさせとていふこと河の雑果とてやあさうて佳品ありと
 いふまた新町の産品も其蕎麥素ハ阿仁の銀山の
 産品似て木曾の味噌の味もや、似たり此三ノ品こそ
 沼柵の土毛といひいふこといふものなり

沼館郷中

- 家員 百三戸
- 人数 五百十人 小児共
- 馬数 五十九足